

2026

8

令和8年8月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻396号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

ともあそぶ



公益財団法人
さわやか福祉財団

思恩忌 夏



さわやか福祉財団の事業運営に

多大なご貢献をいただきましたご遺贈者様、故人の皆様のご恩に
あらためて感謝する場として、**思恩忌 夏**を執り行いました。

(本文 39 ページもご覧ください)



公益財団法人
さわやか福祉財団

とある

2026年8月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

施設とつながる地域づくりの意味とは

清水 肇子

4 | 生き方・自分流 |

「自分型」認知症と共に 支え、支えられて生きる

NPO法人ケアラーネットみちくさ「カフェみちくさ亭」

代表 布川 佐登美さん（千葉県柏市）

10 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

顔見知りで安心！ 楽しい！ 近隣に広がる移動支援活動

支えあいボランティア チーム弓削（京都市右京区）

22 シリーズ 定年、その先へ 東京都江東区 実践ルポ 4

人がつながる カフェ 06

― 自治会が育てた地域の居場所

一般社団法人地域コミュニティ振興協会代表理事 肘井 哲也

新しいふれあい社会づくりに向けて

18 「地域助け合い基金」

助成先のご紹介／状況のご報告

26 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・

ご寄付者の皆様のご紹介

27 NEWS & にゅーす

29 活動日記（抄）

16 <コラム> 協議体主催「バスケット
さわやか広場」（山梨県南アルプス市）

21 「地域助け合い基金」に関するお知らせ

24 「いきがい・助け合いオンラインフェスタ
2026」プログラム

40 みんなの広場 / 投稿募集

41 （一財）長寿社会開発センター
研究セミナー動画配信

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと・山本 美樹夫

施設とつながる地域づくりの意味とは

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

ある新米生活支援コーディネーターが、以前こんなことを話してくれた。

「地域の特養（特別養護老人ホーム）とも何らかつながりがつくれるといいのですが」。どんな進めてみればよいのではと、話を聞いてみると、まず上司が良い顔をしないのだという。特養は在宅生活が困難な人のためのもので、在宅サービスを充実させることが目的の自分たちとは別である。特養側も多忙で相手などしてられないだろうから、そもそも難しいと。

今時そこまでタテ割りの考えがまだ残っているのかと、数年前の話ではあるが話を聞きながら驚いた。複合型施設として特養と共に介護や医療の様々な機関を併設し、地域の交流拠点も開くような取り組みも各地で進んできている。特養をはじめとした高齢者施設は、地域に暮らし続ける高齢者にとっても、また子ども支援の観点からも大きな役割が期待できる。

しかし、確かに世間一般には特養がどんなところか、知らない人のほうがほとんどではないかと思う。親族等の介護に直面するまでは距離がある施設であり、その運営を見聞きする機会は少ないのではないか。尊厳ある高齢期の暮らしは、身体が弱ってきていても認知症であっても自分が主体的に生きていける場が一番であり、それは自宅であろうが特養であろうが変わらない。それまでの親しい友人や仲間の人たちとも変わらずにつながりながら、地域社会の中での人生

を継続したいと願っている。そのためにはやはり期待される柱として互助の充実が不可欠であろう。住民がボランティアで介護の現場に接点を持つことは、単なる支援以上の意味を持つ。外部の目が日頃から届くことで、本人の尊厳ある暮らしを支える大切な基盤ともなっている。

先月、公益財団法人Uビジョン研究所が高齢者施設の虐待防止についての要望書を国に提出した。高齢者虐待防止法施行から20年、虐待は後を絶たず深刻な状況が続いており、抜本的な仕組みづくりが急務と訴えている。Uビジョンは高齢者・障がい者施設・グループホームのサービスの質を保証する日本で初めての認証・評価を実施している第三者機関。創立者であり現所長の本間郁子さんは、本誌連載「人生100年 地域とつながる施設とは」の寄稿者でもある。Uビジョンでは3月に、養介護施設従事者等による高齢者虐待の実態をまとめているが、同書によれば、虐待の「相談・通報」は、現場の職員（元職員を含む）が最も多く40・4%（2024年）。職員の意識と行動に心強さを感じる、とする一方で、外国人職員の増加は特に自治体への相談・通報のハードルが高く、また家族など身内の訪問が今後減っていくであろう中での環境悪化も懸念している。だからこそ一層、地域住民の関わりが求められてくる。

併せて作成した「虐待防止チェックシート」は、虐待の芽に事前に気づき、課題意識を皆で持つ適切なチームケアを行えることを目的としている。9分類82項目が記載されており、在宅の生活支援でも参考にするとよい内容もある。「言葉使いは友達感覚で「ため口」で話している」「利用者の前で職員同士が個人に関する話を話したり確認したりしている」（分類①言葉・態度）など、いつの間にか無意識に行ってしまうことはないだろうか。

特養は決して閉ざされた空間であってはいけない。施設に暮らす人も施設そのものも地域の一員であり、住民主体の地域づくりを共に進めるうえでぜひ連携を深めていてもらいたい。

方・流 生・分 自

〃自分型〃 認知症と共に 支え、支えられて生きる

NPO法人ケアラーネットみちくさ「カフェみちくさ亭」

代表 ぬのかわ 布川 さとみ 佐登美さん (千葉県柏市)

柏市の田畑が広がる地域に建つ一軒家のカフェ。
布川佐登美さん(66歳)は、ケアラーが集うこのカ
フェを運営し、現在は自らも認知症当事者として支
え合いの活動を続けています。その〃自分流〃の歩
みを取材しました。

(取材・文/境 朗子)

真夜中の母からの電話

時計の針が深夜12時をまわった頃、受話器の向こう
から布川さんの母・ユキ子さんの切迫した声が響く。
「お金がなくなったの」

1990年代後半から、ユキ子さんに認知症の症状





布川さん一家。2004年頃、旅行先にて。
中央は母・ユキ子さん

が現れていた。当時、東京都府中市に家族と暮らしていた布川さんは、柏市の実家でひとり暮らす母のもとへ車を走らせる。ヘッドライトが照らす先には、いつまで続くか分からない不安な未来が横たわっていた。2時間ほどかけて到着するや、母と一緒に盗られたはずのお金や物を探し始める。母がようやく落ち着き、寝息を立てる早朝4時頃、再び自宅へ向けて車を飛ばす。帰宅すれば休む間もなく子どもの弁当を作り、そのまま仕事へ。そんな生活が何年も続いた。だが、懸命に支えても母は「佐登美が盗んだんだろ

う」と心ない言葉をぶつけてくる。

実家の近隣住民からは「庭の草が伸びて荒れている」「一人暮らしで火事でも起こされたらどうするのか」と責められた。布川さんは眠れなくなり、深い「介護うつ」へとのみ込まれていった。母が

認知症だと認めたくない気持ちも、ずっとどこかにあったという。

誰にも頼らず介護

布川さんの芯の強さは、母譲りだ。おしゃれとダンスが大好きだった母は、シングルマザーとなつてから家政婦などで身を粉にして働き、布川さんら3人の子どもを育て上げてくれた。そして末っ子の布川さんに、母はこう言い聞かせた。

「一人では生きていけない。でも、人生は自分の力で切り開いていくの」。この言葉は、布川さんの生き方に大きな影響を及ぼした。経済的に厳しい状況にありながらも、子ども好きな布川さんは保育士資格が取れる学校に進み、卒業後は保育の仕事に情熱を注いだ。

だが、介護においては「自分の力でやり抜かなければ」という強い責任感が自分自身を追い詰め、母を取った後も、うつ病による入院と療養を繰り返し続けた。

やがて布川さんは「悪いのは母ではない。私が誰にも頼らずに、一人で介護を抱え込んだからだ」と気づく。そして、こんな気持ちが芽生えてきた。

「ケアラー」とは一般に、介護、看病などケアが必要な親族や友人等を実費でケアする人という。

「分かってくれる誰かに苦しさを打ち明けられていたら、違っていたのではないか。同じような思いをしている人は、きっといるはず。それなら私が話を聞こう。そういう居場所をつくらう」

自分自身を取り戻し、前を向けるようになるまで5年の歳月が必要だった。

さまざまな協力があってこそ

布川さんは一念発起し、介護福祉士の資格を取得。ある日、新聞記事で「ケアラズカフェ」の存在を知る。孤立しがちなケアラーが気軽に立ち寄り、悩みを分かち合ったり、情報を得たりくつろいだりできる場所。「自分が探していたのはこれだ」と直感した。

ちょうど開催されていた立ち上げ講座を迷わず受講し、空き家になっていた実家を改装。2013年10月、ケアラズカフェ&いきぬき処「みちくさ亭」がオープンした。

みちくさ亭は、道路を挟んだ向かい側に田畑が広がっていて、駅からは遠い。どうすれば人が集まってくれるかが課題だった。

「そうだ、農家さんに野菜を安く分けてもらって販売しよう」

布川さんは持ち前の行動力で近所の農家を訪ね、あふれる思いを伝えた。すると、農家の人は「いいねえ。私も介護中だけど、普通の喫茶

店では介護のことはなかなか大きな声で話せないものね」と気持ちを受け止めてくれた。

玄関先に野菜を並べると、通りかかった近所の人たちが足を止める。2か月で600枚配り歩いたチラシも功を奏し、来店が増えていった。「ボランティアで手伝いたい」と名乗りを上げる人も徐々に現れ、地域との絆が少しずつ、着実に結ばれていった。



(上) みちくさ亭
開設間もない頃



(左) みちくさ亭玄関前で野菜を販売。通りかか
る人の目に留まり、カ
フェに人を呼び込んだ

地元の藤心地域ふるさと協議会は回覧板で紹介してくれたし、市社会福祉協議会もネットワークを使っての情報発信に協力を惜しまなかった。

「さまざまな方たちの力を貸していただいて、思いは実現するものだ」と気づきました」

みちくさ亭の一番の特徴は、介護家族や認知症本人だけでなく、地域の一般客もたくさん来店することだ。布川さんは母の介護中、「あなたのお母さん、認知症で頭がおかしくなったんだって？」という近所の人の言葉にショックを受けたことがある。無自覚な偏見は、知らないことから生まれる。だからこそ、ランチを目的に来店する一般客と、認知症の当事者や家族とが同じ空間で過ごすことにこだわった。

「認知症の有無にかかわらず、何度か顔を合わせるうちに、言葉を交わして馴染みの関係になり、みちくさ亭以外でも誘い合って一緒に出かけるほど仲良しになったりするんですよ」とうれしそうに話す。

不安を消せるのは、共に歩むこと

活動を始めて4年ほど経った頃。突然、行き慣れた

いる場所の景色が真っ白になった。

「私はどこにいたのだらう——」

行き先も分からず、途方に暮れた。みちくさ亭のキッチンに立つても「あれ、味噌汁ってどうやって作るんだっけ」と、得意なはずの調理の手順が分からない。単純な計算で混乱した。疲れているせいで、現実から目を背けてがむしやりに動いた。でも、やはり自分は今までとは違う。

認知症に詳しい知人の看護師に打ち明けると、専門医を紹介され受診にも同行してくれた。診断は、MCI（軽度認知障害）の前段階であるSCD（主観的認知機能低下）だった。医師は「脳の血流が悪い。カフェの活動は、やめちゃだめだよ。一気に進む恐れがあるから」と言った。



リフォーム前のみちくさ亭。
おいしくて栄養満点のランチに人々が集う

「いったい私に何が起きたの？　これからどうなっていくの……」

友人に相談すると「年を取れば誰でも忘れっぽくなるんだから」と軽いなされ、心に蓋をされたような感覚になった。

そんな折、布川さんは、支援していたケアラーが自ら命を絶つという出来事に直面する。強烈なショックで自分を責め、ふさぎ込む日々。活動を続ける意味さえ見失いかけた。

そんな彼女を救い出したのは、やはり「人とつながること」だった。ケアラー支援の仲間たちが自分事として懸命に支えてくれ、それが希望を照らし出した。不安を解消するのは、互いに理解と関心を深めながら共に歩みを重ねていくことだと知った。



葛藤と解放

一方で、布川さんの症状は進んでいた。ランチの準備にもこれまでの倍以上の時間がかかり、幻視や錯視なども始まっていた。

SCDの診断から4年経った頃、みちくさ亭を手伝

っていた息子の潤さんから「お母さん、どう見ても変だから、もう一度病院で検査して」と言われ、ハッとした。迷惑をかけるのを恐れていたが、もう逃げるわけにはいかない。

検査を受けて下された診断は「レビー小体型認知症」だった。

「そのとき、心が晴れたような気がしました。だって、自分が何者か分からない不安からようやく解放されたのですから」

それでも、「自分が認知症であることを公表するのは正直、苦しい作業だった」と吐露する。これまでの自身のアイデンティティを失い、単なる一人の認知症になった人として捉えられてしまうのではないか。

背中を押してくれたのは、潤さんだった。潤さんもまた、かつて布川さんがうつ病で入退院を繰り返していた時代に、母を支えた元ヤングケアラーだったのだ。

「お母さん、苦しいよね。だけどお母さんが誰にも言わなかったら、僕だって誰にも相談できないんだよ」

この切実な訴えは、布川さんの心を揺さぶった。かつて母を見送った後、「二人で抱え込んではいけない」と分かったはずなのに、今度は息子を孤独にさせ



みちくさ亭での語らいのひとつ。中央は布川さん

てしまふところだった。

葛藤を抱え、苦しくて苦しくて、信頼する認知症専門医に相談した。

「介護している方たちと向き合うのが怖い。認知症の私を前にして、つらさや怒りを吐き出せるとは思えませんが」

するとその医師は、こう言つて微笑んだ。

「面白いじゃないですか。認知症当事者がケアラーの話を

聴いて支援する。これまでできなかったことですよ」

確かにそうかもしれない。布川さんは、みちくさ亭のボランティアスタッフに集まってもらい、認知症の診断を受けたことを打ち明けた。驚きと沈黙が続く中、スタッフの一人が真っ直ぐに布川さんを見て言った。

「布川さんは布川さんのままでいいんじゃないですか」すると他のスタッフも「みんな、布川さんと話したいのよ」「当事者としての声をもっと聞かせてほし

い」。次々上がる声に胸が熱くなった。

「当事者が抱える不安は、誰かと共有することで光が射し込む。自分が当事者となつてそのことをあらためて、身をもつて教えられました」



布川佐登美型 認知症と共に生きる

今、布川さんは周りの人々とお互いに見守り、見守られながら活動が続けている。そして、「認知症支援つて、認知症について知るより、目の前の人に関心を持ち、その人を知ることのほうが大事なんです」と語る。

「私はレビー小体型認知症ですが、それは私のほんの一部。私の認知症は、布川佐登美型なんです」

診断名に自分を合わせるのではなく、自分らしい生き方をつくつていけばいい。特別な人ではなく、一人の生活者なのだから。

真夜中の暗い道路を一人きりで車を走らせていたあの頃の自分に、今なら何と声をかけられるか聞いた。

「大丈夫、ぬくもりのあるあったかい居場所が待っている。あなたは一人じゃないよと言いたいですね」

広げよう つなげよう 地域助け合い

活動の現場から



顔見知りで安心！ 楽しい！ 近隣に広がる移動支援活動

支えあいボランティア チーム弓削（京都市右京区）

映画の撮影所で有名な太秦がある京都市右京区。その中心部から車で1時間かかる山間部の京北地域に、「自分たちにもできる」と移動の困り事解決のために立ち上がった住民たちがいます。楽しく前向きに取り組む姿を取材しました。

（取材・文／森 祐子）

「ここなら年を取っても安心」
「役に立ってうれしい」



「チーム弓削」というマグネットシートが貼られた車が民家の前に停まり、家の前で待っていた女性が乗り込んだ。

車内にはすでに3人の女性が乗車しており、「信子さんは、今日はあかんかったみたいやで」「あら、そうなの？」と、情報交換で盛り上がっている。運転するのは同じ集落に住む「支えあいボランティア チーム弓削」のメンバー

1、米津一記さん（71歳）だ。

この日は京北第三小学校跡地で年7回開催される「弓削ふれあいラウンジ」の日。右京区社会福祉協議会京北事務所（以下、京北事務所）と弓削自治会が共催で開催する住民の交流イベントだ。ラウンジ参加者の送迎を担うのは、地域の住民ボランティアが自家用車を使って移動支援を行っている「チーム弓削」だ。

参加者の米津順子さん（79歳）は「ラウンジに行くと、普段会わない人とも交流できるので楽しみにしているんです。車が家の前まで来てくれるのが助かります。生活していると、ラウンジ以外にも買い物、病院、銀行など行き

たいところはいろいろあるでしょう。

この地区はチーム弓削があるから、年を取って運転免許を返納しても安心です」と笑顔で答えてくれた。

運転手の米津一記さんも「こうやって喜んでくれるのがうれしいですね。役に立っているんだと実感します」と



利用者を迎えに来た米津一記さん。
雨の日の移動支援はいつにもまして助かる

笑顔だ。

利用する人も運転する人もうれしそうで、とてもアットホームな雰囲気だが、それもそのはず。全員もともと知り合いなのだ。ここ京北地域上弓削地区は5つの小さな集落に分かれていて、集落内で知らない人はいないのだとか。



楽しそうな車内の様子

立ち上がった7人の侍 「チーム上弓削」誕生

京都市は11行政区に分かれており、右京区は市の北西部に位置する。市内で一番広い区で、その約7割を広大な自然が占める。京北地域は、2005年に旧京北町が右京区の一部となった地域で人口約4000人、高齢化率は50%を超える。

チーム弓削が活動する京北地域は、総面積の実に9割以上が森林で電車は通っておらず、移動手段は車かバスのみ。以前はあったタクシー会社が撤退し、移動販売も減少してしまった。

「畑の肥料が早う欲しいけれど、息子は日曜日まで帰らへん」といった高齢者の声も聞かれ、移動支援は待ち望まれている。

そこで立ち上がったのが、京北地域上弓削地区に住む、旧京北町役場職員

だった古家^{こや}實義^{みよし}さん（75歳）を中心とする「7人の侍」たちだ。



チーム上弓削の皆さん。前列左から市野さん、古家さん、米津さん、後列左から石浦さん、大前さん、佐伯さん、寸田さん

きっかけは、2024年に開催された国土交通省近畿運輸局から講師を迎えたセミナーだった。参加した

古家さんは、移動支援はタクシー業者とは違う仕組みで、自家用車でもできることを知った。

「これなら、ワシらでもできるんじゃないか？」と思い、同じく役場OBの米津一記さんに声をかけた。2人は日頃から、京北事務所が提供する福祉有償運送の運転手をしている仲間だった。福祉有償運送は、要介護認定を受けている人など利用者が限られる。もっと気軽に利用できる移動支援が必要だと感じていた。

上弓削地区で新たに移動支援を立ち上げようと決めた2人は、昔から気心の知れてい

る仲間たちに声をかけた。同じく移動支援のセミナーに参加していた石浦隆さん（68歳）、自治会副会長の市野繁和さん（69歳）、佐伯隆さん（71歳）。3人とも役場のOBだ。ここまで声をかけたときに、上弓削地区5集落のうち、4集落の住民がメンバーに入っているが、もう1集落の住民がいないことに気がついた。そこで、昔から仲のいい寸田寿さん（65歳）と大前靖さん（67歳）に声をかけ、立ち上げメンバー7人がそろった。24年7月、「チーム上弓削」の誕生である。

納得できるまで話し合い 「みんな知り合い」の強みを発揮

京北事務所にも参加してもらい、7人は話し合いを重ね、上弓削地区に合った移動支援をつくり上げていった。当時の担当生活支援コーディネーターだった大岩麻実さんは、「会議の設定

や保険会社との調整、マグネットシートやユニフォーム製作のお手伝いをさせていただきました。住民の皆さんが『やってみよう！』と主体的に立ち上がり、形になっていく場面に立ち会わせていただきました」と話す。

また、当時京北事務所所長だった市野浩子さんは、「初めてのことなので、不安や疑問がたくさん出てきました。保険会社を呼んで説明してもらうなど、その都度全員が納得できるサポートを心がけました」と振り返った。

話し合いは進み、運行等の仕組みも決定。特長は、事務所やコーディネート者を置かずに、利用者が直接チーム上弓削のメンバーに電話して依頼するシステムだ。古家さんはこう説明する。「予算もないので、コーディネートは置いていません。地区の全戸へ配布したチラシに各メンバーの電話番号が書いてあります。それぞれのメンバー

が個別に依頼を受けて、自分の車で送迎します。上弓削地区は5集落に分かれていますので、それぞれの地区にメンバーは1人か、多くて2人。同じ集落でないといわざわぎ迎えに行くのも手間ですから、利用者はみんな自分の集落に住む決まったメンバーに連絡します。小学校も中学校も1つだけだったので、集落はみんな子どもの頃からの知り合いなんです。顔が見える関係だから、頼みやすいというのがありますね」

住所を聞かなくても電話1本で誰か分かり、家もどこにあるか分かるという手軽さがいい。

自家用車を使うことについて米津一記さんに聞くと、「社協の車を使うとなると、まず自宅から京北事務所にある取りに行つて、そこから利用者のお迎えに行かなければなりません。福祉有償運送と違って、チーム上弓削の活動は同じ集落内から依頼が来るので、

自宅からすぐお迎えに行ける自家用車のほうがいいんですよ」と説明してくれた。

自家用車での移動支援は、チームの仕組みと地域性に合っているようだ。

寸劇に大反響！ 弓削地区全体へと活動拡大

立ち上げ準備には多少のお金もかかるが、その頃ちょうど右京区のまちづくり活動を紹介するコンテスト「右京M-1（まちづくりワン）グランプリ」が開催されることになり、最優秀賞には賞金が出ることが分かった。新しく立ち上げたばかりのチーム上弓削のPRにもなるし、賞金があれば活動資金にできる。7人は、活動を分かりやすく紹介する寸劇の台本を作り、自分たちがエントリーして演じることにした。

するとこの寸劇が大ウケし、見事、



チーム上弓削による寸劇の様子。
メンバーが高齢者などに扮し、
セリフで活動を分かりやすく説明



最優秀賞を獲得。賞金で、各
自の車に貼るマグネットシー
トを作ることができた。
驚いたのは、これを機に続
々と寸劇の出演依頼が舞い込
んだこと。石浦さんは、「右
京区社協や南丹市社協などあ

ちこちらから依頼が来ては、道具を持っ
て駆けつけて寸劇を披露しています。
さながら劇団一座ですよ」と笑う。

現在の右京区社協の生活支援コーデ
イネーター宇都正樹さんは、「寸劇は、
45分くらいの超大作です。7人がおじ
いさん・おばあさんに扮して移動支援
が必要な状況を演じ、面白おかしく活
動を紹介する内容になっています。皆
さんいきいきと演じていて楽しい上に、
この活動の重要性もよく伝わります」
と、その素晴らしさを語ってくれた。

こうしてチーム上弓削の活動は徐々
に話題になり、「こんな素晴らしい活
動を、上弓削地区だけ利用できるのが
うらやましい」という声が上弓削地区
も所属する弓削自治会に届くようにな
った。チーム上弓削のメンバーで弓削
自治会副会長の市野さんは、チーム上
弓削の活動内容や仕組みを弓削自治会
の住民たちに説明してまわった。市野

さんがパイプ役となり、チーム上弓削と弓削自治会で何度も話し合いを行い、自治会が後援する形で、上弓削地区以外でも運転ボランティアを募集することになった。

そして、今年1月からは対象地域を弓削自治会エリア全体に広げ、名称も「チーム上弓削」から「チーム弓削」に変更して再スタートを切った。7人で始まった活動は、今では19人の運転ボランティアがいる活動へと広がりを



右京区社協の宇都さん（左）と、京北事務所の岩本さん（右）

の方安心して利用されており、大変感謝しています」と話してくれた。

代表の古家さんは「寸劇を見て、自分たちも移動支援をやりたいと言ってくれている地域がほかにもまだまだあります。近隣地区でも新たに活動が立ち上がりました。これからもっと広がつていき、地域住民の生活が豊かになるといいと思います。あとは若い世代の後継者育成が課題ですね。これから仲間たちと頑張っていきたいです」

見せている。弓削自治会からの後援を受けられたことで、自治会による周知活動や受付のサポートなど、環境も整ってきている。

京北事務所で福祉有償運送を担当する岩本真明さんは「近年、福祉有償運送の依頼件数が増えて、お断りする場合も出てきました。チーム上弓削で始まった活動が弓削地区全体に広がったことで住民

と力強く語ってくれた。

熱き思いは寸劇というアイデアを通じて地域に広がり、これからは住民の生活をあたたくサポートしてくれることだろう。

支えあいボランティア チーム弓削

弓削の住民の移動をボランティアのマイカーでサポート。
弓削自治会が後援・協賛している。

- ◇対 象：外出に困っている弓削地区に住む人・付添者
- ◇行 先：京北地域内
- ◇協力金：1回1,000円、相乗りの場合は1人500円
- ◇登録料：初回登録時のみ1人1,000円
- ◇利用日：原則毎週水曜日・土曜日 8時半～17時半
- ◇申込み：原則3日前までに電話で申し込む

●連絡先／弓削自治会 電話075-854-0001

協議体のマンネリ化を解消!?

協議体主催の「バスケットさわやか広場」で 楽しい世代間交流が実現!

山梨県南アルプス市若草地区

山梨県南アルプス市は2018年から協議体が立ち上がり始め、現在、第2層16圏域、第3層61圏域に広がり、住民主体の地域づくりを推進している。協議体の全国モデルともいえる地域である。

第2層協議体の一つである若草地区協議体は活発な活動を展開してきており、「軽スポーツ等を通じて、世代間交流と健康推進」を目指している。そこで、これまで当財団が主催して取り組んできた「バスケットさわやか広場」を提案。世代間交流を推進しようと協議体メンバーがアイデアを出し合って企画し、チラシを作り地域に参加を呼びかけた。財団は共催者として、バスケットボール女子日本リーグ(Wリーグ)所属の山梨クイーンビーズ(同県甲斐市)と協議体の事務局である南アルプス市社会福祉協議会をつないだ。

6月14日(日)、若草体育館は乳幼児を連れた若い世代

や小学生、中学生など高齢者ら150人を超える人たちがにぎわった。クイーンビーズからは、選手とスタッフ計13人が参加した。

最初に選手の皆さんが模範演技を見せると、子どもたちの目がキラキラと輝いた。また、ドリブルやシュートなどの交流、協議体で流行っているモルックを一緒に楽しんだ。

モルックは2チームで競い合う。失敗してがっかりしたり、成功してハイタッチをしたり、熱い戦いで体育館には歓声が響き渡り笑顔が広がった。最後は、選手のサイン会で参加者との交流をさらに深めた。



老若男女問わず
楽しめる
モルックでも
盛り上がった

*モルック 木の棒(モルック)を投げて数字付きのピンを倒し、ちょうど50点になるよう得点を競うフィンランド発祥のスポーツ

「ママ、毎日やりたいよ」「学校があるからだめでしょ」
 「そしたら、週1回でもいいからやらせてよ」——そんな
 声も聞かれた。秋から始まるWリーグでクィーンビーズの
 応援も！と、機運もぐっと高まった。

「協議体って知ってますか？」と小さな子どもを連れた女
 性にたずねると、「初めて聞いた」との答え。「支え合い
 の地域づくりを知っていただく機会にもなりました」とは
 市社協の皆さん。



クィーンビーズの選手から
 子どもたちがバスケットを教わった

みんなで片づけをした後、協議体や市社協の
 皆さんと反省会を行った。

「とにかく事前の周知が大変だったけど、こ
 んなたくさんの人たちが集まってくれて、やっ
 てよかった」「協議体のマンネリもあるからや
 ってよかったね」「多くの皆さんに喜んでい
 だき本当によかった」との感想が聞かれた。

子どもたちの力とスポーツの持つ力を再認識
 させられた日となった。若草地区協議体、市社
 協、行政が一緒になって、裏方でイベントを盛
 り上げる姿も光っていた。

「スポーツさわやか広場」は日本プロサッカー
 リーグ（Jリーグ）の理解と協力を得て29年前
 に開始。サッカーはもとより、バスケット、バ
 レーボール、卓球、新体操、剣道等の多種目に広がった。
 高齢者施設での3者（高齢者、子ども、選手）交流であり、
 財団主催で各地で展開してきた。

今回は、初の地域主催での開催。他の地域でもこのよう
 な取り組みが広がるモデルに願っている。また、これを
 きっかけに若草地区で世代間交流が継続され、支え合いの
 地域づくりにつながってほしい。

（鶴山芳子、蒲田尚史）

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、地域共生社会実現のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、農園での多世代交流と住民による移動・生活支援をご紹介します。なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、多彩な活動をぜひご覧ください。

愛知県春日井市

地域食堂への食材提供と
介護予防、多世代交流の農園

わくわく農園

助成金額 15万円

「わくわく農園」の代表者は、地域に呼びかけて2022年より地域食堂を開催、24年には食堂への食材供給のため「ことぶきわくわく農園」を立ち上げて活動してきました。昨年、別の場所で耕作放棄地を無償で借り受けることが



わくわく農園での昨秋の収穫祭の様子

できたため、新たに高齢者・障がい者等の介護予防やリハビリ、食堂への食材供給と多世代交流を目的として、仲間と共に「わくわく農園」を立ち上げました。

本基金の助成金は、重機費用、土・堆肥・農耕具等の購入費に活用されました。

土作りから開始し、整地、苗付け・種まき等が進み、収穫時期には地域の子どもたちと収穫祭を行うなど順調に活動が進んでいるというわくわく農園。畑の横には休憩コーナーも設置されたということです。地域食堂や近隣住民への生鮮野菜の提供もさることながら、住民の健康増進を図り、地域の多世代交流が進むようにさらに活動を展開したい、と報告をいただきました。

大阪府河内長野市

「困ったときはお互いさま」の地域へ 移動・生活支援活動を開始

生活支援たこうつながりたい「たこのすけ」

助成金額 14万9000円

2022年、高向小学校区では住民主体の支え合い活動

の準備として、校区福祉委員会、校区まちづくり協議会が連携して調査検討を開始しました。ワークシヨップ、先進団体を招いての意見交換等を経て、翌年には各地区の代表からなる「生活支援プロジェクト」が発足。月例会を重ね、校区全戸へのニーズ・シーズ調査を実施したところ、92%の人が生活支援を必要としていることが分かりました。

ちよっとした困り事に悩んでいる人を知り、「地域の中でできることから始めてみよう」と25年6月、



助成金で購入したビブスを着用して移動支援活動

「地域助け合い基金」状況のご報告

7月15日 当財団ホームページ開示時点

◎寄付受付額

440件 2億2264万2637円

このうち遺贈基金より1億8000万円を供出

◎助成実行額

1461件 2億1980万6538円

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

- 基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、上のコードもご利用ください

基金に関するご意見・お問い合わせ

地域助け合い基金担当

電話：(080) 9277-4174

FAX：(03) 5470-7755

メール：

tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

「生活支援たこうつながりたい『たこのすけ』」が発足しました。

本基金の助成金は、活動時に着用するビブスの購入費、リーフレット作成費として役立てられました。

移動支援では医療機関や美容院への送迎、その他の生活支援では庭の草抜き・枝切り、ごみ出し、簡単な修繕などを行っており、発足から今年3月までの移動支援は150

件以上となりました。ビブスを着用することで、住民に安心して利用してもらっているそうです。

「困ったときはお互いさま」の言葉が自然に交わせる地域でありたいと願い、支援を必要とする人が遠慮なく声をかけられる環境づくりと、支える側も安心して参加できる仕組みづくりに取り組みたい、と報告をいただきました。

つながろう、心で 広げよう、笑顔の助け合い！

「地域助け合い基金」

10月から新たに募集を開始します(予定告知)

2020年5月よりスタートした「地域助け合い基金」は、皆様の多大なご支援によりまして、本年で6年目を迎えました。これまでにおよそ2億2000万円を助成し、1400件以上の地域の助け合い推進に向けた取り組みが進められています。

改めて助け合いを広くさらに各地に根付かせていくことを目的として、本年度10月から以下の通り募集を開始いたします。

【概要】

■ 対象活動の分野等

継続的に取り組むことを前提とした以下の活動

- ・地域で暮らす住民同士が自ら実践する助け合い活動
- ・助け合うためのつながりの基盤となる居場所を地域に広げる取り組み
- ・その他、地域で助け合いを広めるために必要と判断される取り組み

※次のような活動は対象となりません。

- ・単発のイベントなど、一過性の取り組み
- ・体操やレクリエーション・知識講座など、健康・趣味活動・勉強そのものを目的とするもの

■ 助成の対象

法人・個人（法人格の有無は問いません。）

- ・高齢者、子ども、障がい者、外国人など、制限はありません。
- ・日本国内の活動。申請者が暮らしているまたは日頃関連している地域での活動が対象となります。

■ 助成額と回数

上限15万円。原則1回（過去にご応募いただいた場合は対象となりません）

■ 募集と配分審査

毎月ごとにご応募いただいた活動について、原則翌月に配分の決定を行います。

■ 活動報告の公開

助成した活動については、ご報告をいただき、当財団のホームページや本誌等で広く公開させていただきます。

※その他、応募に関する詳細は、追って当財団ホームページや本誌等でご案内いたします。

シリーズ

定年、 その先へ

地域とのつながり方

東京都江東区
実践ルポ

4

人がつながるカフェ06 自治会が育てた地域の居場所

（取材・文）一般社団法人地域コミュニティ振興協会代表理事 肘井哲也

東京都江東区にあるUR大島六丁目団地。入居開始から50年以上が経つ、約2900世帯が暮らす大規模団地である。その団地の緑に囲まれた一角に、紺色の外壁が印象的な「コミュニティサロンカフェ06^{ゼロロク}」がある。営業日は週2〜3日、午前11時から午後2時までの3時間。開店前から利用者が集まり、店内には自然と笑顔があふれている。特製ランチは大好評で毎回売り切れになる程大人気である。

木の温もりを感じる店内では、平均年齢75歳を超える団地内外のボランティアスタッフがところ狭しと動きまわり、明るく声を掛け合いながら利用者を迎えている。常時8〜9人はいるボランティアスタッフの姿は、この時間そのものを楽しんでいるように見える。「こんにちは」「今日は元気だった？」カフェではそんな何気ない

会話があちらこちらで交わされ、初めて顔を合わせた人同士が自然に話し始める光景も珍しくない。

いつもスタッフも利用者も笑顔が店内いっぱいに広がっている。カフェ06は高齢者も、子育て世代も、子ども、誰もが気軽に立ち寄り、人と人がゆるやかにつながる「地域の居場所」となっている。

その取り組みは高く評価され、現在では全国から自治会や行政、地域づくりに携わる関係者が視察に訪ねてくる。なぜこのような居場所、カフェ06が生まれたのだろうか。その答えは、半世紀以上にわたり団地を支え続けてきた自治会の歩みにあった。

中心となったのは、大島六丁目団地自治会長の中島政幸さんと、副会長の高橋久美子さんである。

大らかで面倒見のいい中島さんは現在83歳。30年以上

自治会長を務める一方、現在も現役で仕事を続けている。「会社に迷惑をかけない範囲で地域のこともやればいい」という職場の理解のもと、昔から仕事と地域活動を両立してきた。中島さんが大切にしてきたのは、「自治会は、いろいろな人の意見を聞き、それをまとめるところ。会長一人でするものではない」という考え方である。一人が引く張るのではなく、多くの住民の思いを生かす。その姿勢が長年にわたり自治会の信頼を育み、「人を大切にす文化」を団地に根付かせてきた。

その土壌の上で、カフェ06構想を形にしていたのが高橋さんである。大島六丁目団地では、高齢化や外国籍住民の増加により、住民同士のつながりが薄れつつあった。高橋さんは、「誰もが気軽に集まり、安心して話ができる場所が必要ではないか」と考え、その思いを自治会へ投げかけた。

2017年、自治会とURとの意見交換をきっかけに、地域の居場所づくりが動き始める。翌年には住民参加のワークショップが何度も開催され、多世代が集う場について話し合いが重ねられた。その後、自治会が運営主体となることが決まり、準備委員会では運営方針や活動内容をも住民自らが検討した。カフェの名称も住民公募によ

って大島の頭文字Oと6丁目の6を合わせて「カフェ06」と決定された。

そして2020年9月、カフェ06は地域待望の居場所として誕生した。現在は、高橋さんをはじめ、団地内外のボランティア、UR関係会社でコミュニティづくりに携わっていた菊池清美さんなど、多様な人材が活動を支えて、現在20名程のボランティアスタッフが活躍している。高橋さんは、「自分の住む団地に、人と人がつながる居場所が生まれたことが何よりうれしい。そして、その場所を仲間とともに育てながら、地域の役に立てていると感じられることが、一番の喜びです」と語る。

地域の課題に向き合った自治会が、住民やURとともに知恵を出し合い、「この団地に本当に必要な居場所とは何か」を問い続ける中から生まれた場所である。

ここでは世代を超えて自然に言葉が交わされ、一人でも気軽に立ち寄れる。カフェ06は、団地に暮らす人々の心に寄り添う居場所となっている。

（ひじい てつや）東京都江東区・江戸川区、横浜市港北区を中心に地域の社会活動等に幅広く関与し、シニア、高齢世代向けの地域活動情報紙「えがお」、地域の共生社会活動をテーマにした「みなてらすPRESS」を発行する。認定NPO法人キッズドア理事、贈答品会社株式会社東香代表取締役。

プログラム

いそがい・助け合い オンラインフェスタ 2026

概要は裏表紙をご覧ください。お申し込み受付は8月14日(金)開始です。

オープニングフォーラム

「ウェルビーイングを支える幸福な生活支援」

進行役	宮本 太郎氏	中央大学法学部教授
登壇者	新田 國夫氏	(一社) 日本在宅ケアアライアンス理事長
	伊藤 達矢氏	東京藝術大学社会連携センター教授
	澤出 桃姫子氏	(特非) ホームヘルパーノア理事長 日常生活支援 あつべつ・たすけ愛ふくろう代表
	江田 佳子氏	佐々町多世代包括支援センター参事

特別トーク

- 石山 麗子氏 (ケアマネジメントにおける助け合いの位置づけ)
- 近藤 克則氏 (孤立予防と社会参加、助け合い)
- 杉山 孝博氏 (認知症の人への理解と対応)
- 田中 滋氏 (目指す共生社会と2040年に向けた地域包括ケアシステム)
- 辻 哲夫氏 (SCと協議体とフレイル予防)
- 中村 秀一氏 (これからの社会保障のあるべき姿)
- 村木 厚子氏 (共生社会を創るために)
- 佐藤 清和氏 <厚生労働省> (地域づくりに関する最新政策動向)
- 大西 連氏 <内閣府> (地域づくりに関する最新政策動向)

学ぼう編

地縁での助け合いをどう進めていけるか／助け合いにつながる居場所とは／住民の意識をどうしたら醸成できるか／地域に広げよう生活支援(有償ボランティア)／シニアの地域参加の広げ方／認知症の人と共に生きる地域づくり／子どもの育ちを地域で応援しよう／助け合いの価値と評価の考え方とは

語ろう編 ※ライブ配信のみ。双方向での意見交換・質疑応答有

- 生活支援コーディネーターと協議体による地域づくり
- 共生常設の居場所と多様な主体の連携
- 一人ひとりのニーズをどう地域全体で解決するか

- ◆ オンラインフェスタ概要は、裏表紙も併せてご参照ください。
- ◆ さらに詳しい内容は、財団ホームページ内オンラインフェスタ特設ページからもご覧いただけます。

<URL><https://festa.sawayakazaidan.or.jp>

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

● ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

● さわやか活動日記（抄）



ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。

新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2026年6月1日～6月30日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

さわやかパートナー個人 (42件)

(都道府県別50音順)

宮城県	永末 厚二	松下 晃久
河村 憲二郎	千葉県	吉田 由依
福島県	三勢 光俊	新潟県
須田 弘子	東京都	杵渕 美智子
茨城県	大井 利雄	小林 弘文
関 正樹	蒲田 尚史	山梨県
丹 協子	川上 五郎	川村 めぐみ
丹 文子	佐々木 美智子	岐阜県
栃木県	澁谷 勝彦	清水 孝子
橋本 玲子	林原 満子	静岡県
群馬県	保坂 雅宣	脊古 光子
小山 範之	升田 忠昭	愛知県
埼玉県	渡邊 一衛	久保田 久代
青木 武雄	神奈川県	滋賀県
高橋 照夫	桑野 映美	梅沢 久子

京都府

奈良県

福岡県

嶋田 雅文	平田 京子	福岡県
松本 一芳	岡山県	池田 理和
大阪府	村松 章子	熊本県
中原 和之	広島県	木下 眞理子
山浦 まき子	黒木 詔子	沖縄県
	林田 規子	比嘉 玲子

さわやかパートナー法人 (7件)

(50音順)

NPO法人あすなろ友の会
株式会社公文教育研究会
NPO法人たすけあいあさひ
NPO法人たすけあいほっとライフ小川
株式会社東京映画社
株式会社八洋
NPO法人ふれあい福祉の会山びこへるぷ

一般ご寄付 (2件)

(50音順)

株式会社八洋 (50万円)
ボランティア・ベンダー協会 (39万5306円)



NEWS

& にゅーす



令和7年度（2025年度）

決算が承認されました

期末指定正味財産

30億5075万1270円

期末一般正味財産

8億4808万9964円

6月3日に理事会、22日に評議員会
が、東京都千代田区にある丸の内中央
ビル内の会議室で開催されました。主

な議案は令和7年度事業報告並びに決算の承認で、ウェブ会議システムも活用し、それぞれ定刻に開会しました。

理事会、評議員会ともに、まず清水理事長が令和7年度の事業全般について説明し、鶴山常務理事による現場からの補足説明、事務局長・大石から決算概況説明を行いました。いずれも活発な質疑応答と意見交換が行われた後、事業報告並びに決算報告は全会一致で原案通り承認されました。

助け合いの活性化と創出を強力に推進

令和7年度は、「つながりの再構築」と「助け合いの推進」を改めて基本方針に掲げ、住民主体の地域づくりと地域共生社会の実現に向けた事業を強力に推進しました。少子高齢化や单身世帯の増加、社会的孤立の深刻化により、公的サービスだけでは対応が難しい地域課題が増える中、住民同士の助け合

いの重要性はますます高まっています。生活支援体制整備事業・総合事業開始から11年が経過し、地域ごとに取り組みが進められていますが、その状況と成果には大きな差が見られます。そうした状況を踏まえながら、個別支援はもとより都道府県の伴走支援を通じて地域課題に丁寧に取り組み、また関係団体との連携を深めながら各事業を強力に展開しました。

ふれあい推進事業（公益目的事業）

6つのプロジェクトに取り組み、住民主体の地域づくりと助け合いの仕組みづくりを進めました。各地への支援は当年度は約330回となりました。この11年間では約700自治体に直接的な支援・働きかけを行っています。「いきがい・助け合いオンラインフェスタ」に加え、初の開催として長崎県で地域版フェスタを開催し、いずれも実践者の学び合いの場として大きな反

響を得ました。また動画制作にも力を入れ、「助け合い体験ゲーム」の発信や「心つながる」シリーズによる現場の活動紹介も開始しました。これらは全国のさわかインストラクター、助け合い推進パートナーの方々とも協働しながら取り組んでいます。「地域助け合い基金」も継続し、累計で2億円超、1410件となりました。

社会参加推進事業（公益目的事業2）

5つのプロジェクトを実施し、高齢者をはじめ現役世代や子どもを含めた幅広い世代の社会参加及び寄付による応援を促進する事業を展開しました。シニア世代の社会参加の重要性を広く理解してもらうため、当財団が事務局を務める「高齢社会NGO連携協議会」として第34回日本老年学会総会の場合、合同シンポジウムを開催。また現役世代には介護離職防止を切り口に企業や労働組合へ働きかけ、地域とのつなが

りを持ち続けることの重要性を発信しました。併せて子どもの育ちを地域で応援するための提言や事例収集と情報提供を進めました。生活に困難を抱える子どもたちへの支援についても地域連携を見据えた情報収集を新たに進めています。

情報・調査事業（公益目的事業3）

3つのプロジェクトを実施し、『さあ、言おう』『さあ、やろう』の発行やホームページも活用しながら、助け合い活動への理解促進と普及、住民主体の地域づくりを進めるための情報発信を積極的に行いました。情報冊子は当財団のご支援者や関係先の皆様をはじめ、全国の地域包括支援センターや社会福祉協議会も含めて年間延べ17万部を送付しています。また共生社会づくりに必要と考える研究や提言も強力に行いました。改正公益信託法への意見も含めて開かれた責任ある公益法人

運営のあり方を提言、京都大学と「助け合いの社会的インパクト」の共同研究も本格的に取り組んでいます。

ご支援に心より感謝いたします

理事会・評議員会では、他に「理事・監事・評議員の選任」、改正公益認定法に基づいて新たに制度化された「公益充実資金」設置等に伴う「定款変更」及び「諸規則の改正」も審議し、いずれも承認されました。また、当年度にお寄せいただいた「遺贈ご寄付」5名様と現在対応中のお二方の状況についてもご報告しました。

当財団の事業運営は全国の皆様からのご寄付によって進められており、会員の皆様、ご寄付いただきました皆様に改めて心から御礼申し上げます。

事業報告並びに決算報告は、本誌付録及び当財団ホームページでもご覧いただけます。

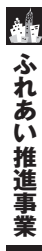
（大石 敏晴）

さわやか活動日記(抄)

SCⅡ生活支援コーディネーター

地域支援事業の活動報告は、このほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

各地・各事業の取り組みをご紹介します



ふれあい推進事業

第1回第1層協議体会議開催 次のステージに向けて考える

■南アルプス市（山梨県）

「6月1日」南アルプス市で年4回開催されている第1層協議体会議の今年度第1回が開催され、講師として協力した。

市介護福祉課・樋泉課長のあいさつの後、地域包括支援センターの塚原麻理指導監より市の状況が報告された。厚生労働省の令和8

年度「保険者機能強化推進交付金」および「介護保険保険者努力支援交付金」において同市が全国12位になったことや、100ほどある評価指標の中には協議体の活動等もあったこと。2023年から要支援1・2が急増し、要介護1が最も多いこと。それらの支援に

介護事業者が対応しているが、互助を広げる必要もある。45年が高齢化率のピークで、人材と財源が不足するため支え手を広げていく必要があること等の内容だった。

続いて、「これからの地域づくりにおいて第1層協議体としてできること」と題し、当財団が講演した。協議体が日本一広がっている全国モデルである同市のこれまでの住民主体の取り組みを生かしながら、次のステージとして何ができるか、どんなことをしていき

たいか一緒に考えようと伝えた。また、初めて第1層のメンバーになった人のために、「なぜ、助け合いか」「SCと協議体の任務」について説明した。

さらに「10年間の成果」と、次のステージに向けて「国の方向性」「地域の実態」を伝え、「第1層協議体として何ができるか」として、①理解者を広げるためにどう周知するか（対象を多世代、他の事業、さまざまな組織団体等に視野を広げる）、②これまでの成果を皆で見える化する、③



南アルプス市で行われた第1層協議体会議

生活支援の助け合いの仕組みをどうするか、④世代を超えたつながりをどう広げていくか、を挙げた。それぞれの組織や個人でできること、第1層協議体として一緒に取り組めること、第2層・第3層とも連携して取り組めること、行政や専門職ができること、連携して取り組めることは？と提示し、考えてもらった。

その後、アドバイザーの斉藤節子氏の進行で、参加メンバーから意見を引き出した。「多世代交流に取り組んでいきたい」「時代が変わってきていることを実感している」（愛育会）、「民生委員と連携して実態把握を」「生活支援のニーズはまだ少ない」などさま

ざまな意見や質問が出て、やり取りをしながら今後に向けて全体で共有した。

最後に市社会福祉協議会地域福祉課の渡辺貴弘課長があいさつし、まとめた。

今年度も11月頃、第1層協議体主催で「支えあいの地域づくり実感フォーラム」

支え合いの輪を広げよう

町社協「生活支援サポーター」養成講座開催

■ 関ヶ原町（岐阜県）

【6月9日】関ヶ原町で町社会福祉協議会の「生活支援サポーター」養成講座があり、講師を務めた。すでに10年ほど継続している

「困りごとサポート事業」という町社協の有償ボランティア事業だが、支援を必

の開催を予定しており、実行委員会が進めていく。これまで実行委員会は協議体の中の住民が中心だったが、この機会に商工会など他のメンバーにも声をかけ、実行委員会を広げて取り組むのもよいのではないかと伝えた。

（鶴山 芳子）

要としている会員の数に対し担い手が少なく、同じ担い手が頑張っている状況。支え合いの輪が広がることを目的に開催された。

最初に地域包括支援センターから「関ヶ原の現状について」として、人口や高



関ヶ原町「生活支援サポーター」養成講座で行われた
助け合い体験ゲームの様子

齢化率の推移に加え、地域の変化（一人暮らし高齢者や空き家の増加、買い物・通院に困る人の増加、ご近所付き合いの減少、「ちょっと困った」が増えている等）について説明された。また、なぜ助け合いが必要

なのか、制度だけでは支えきれない困り事があること、支え合いの地域の効果についても説明があった。

次に「困りごとサポーター事業」について町社協とSCが紹介。買い物支援やその他の生活支援等の活動に

ついてSCが説明し、

「担い手になりませんか」と呼びかけた。担い手の「困りごとサポーター」からも「利用者に『待ってるよ』と言ってもらいうれしい」など、笑顔でやりがいが話された。

当財団は「支えあいについて助けると言えますか」と題して講演した。助

け合い体験ゲームを行い、事例として高知県津野町「地域の応援隊 和」を紹介。有償ボランティアについては、助けられる側の立場に立つことの大切さや団体で活動する意義等について話した。

質疑応答で、「高齢者をケアの対象にしない、プレーヤーにしていくな」と聞いてそういうことかと思った。頑張っていきたい」と手を上げコメントしてくれた参加者もいた。

地域活動充実に向けて

「福祉員制度研修会」開催

■小美玉市（茨城県）

【6月13日】小美玉市では地域福祉推進の取り組みの

事後アンケートでは「こんな些細なことが支えることになる」と分かった。「ボランティアは負担に感じていたけど、日常のことで、できる範囲でいいんだと分かった」「事例の町のようなことが関ヶ原でもあるといいな」「助け合い体験ゲームをもっと深めたかった」等のコメントがあったとのこと。

今回のつながりから、今後にも必要に応じて応援していきたい。（鶴山 芳子）

一つとして、さりげなく見守る地域の見守り役「福祉



小美玉市で行われた「令和8年度福祉員制度研修会」の様子

員」を配置しており、現在350名ほどが活躍している。今回は主に新しい福祉

員を対象に、地域福祉の意識向上を図り、隣近所の見守り活動などを支援していくことで、誰もが安心して暮らせる地域コミュニティの確立を目的として、この日「令和8年度福祉員制度研修会」が開催された。参加者約50名。

主催者である市社会福祉協議会小川支所長の開会あいさつと趣旨説明に続き、市社協地域福祉グループ担当者より福祉員の役割と具体的な取り組みの説明があった。

当財団は「みんなでつくり、見守りと助け合いのある小美玉市」緩やかにながりで安心して暮らし続けよう」と題し、声をかけること・気にかけて見守

ることが、相手だけでなく自分自身の心身に好影響を与えることを説明した。続いて、助け合い体験ゲームを行った。会場に設置された8つのグループからはたびたび大きな笑いが起こり、終始楽しそうな雰囲気でもゲームが進んだ。

グループワークは「毎日の暮らしや見守り活動の中で気づいた困りごと」を共有し、「自分たちで手伝えそうなこと」を話し合った。発表では、ごみ出しの困難、

庭の草むしり、獣害対応など生活に密着した困り事に加え、自治会の加入率低下や通学路の雑草除去等の声も上がっていた。

市社協では、福祉員活動を単に「見守り活動」とするだけではなく積極的に地域に関わるきっかけにしたいと考えており、協議体やSCの取り組みとも強力に連携しながら、地域活動の充実に向けて取り組んでいく予定である。（高橋 望）

「生活支援コーディネーター・生活支援体制整備事業担当者研修・情報交換会」開催

■ 神奈川県

【6月30日】神奈川県主催「生活支援コーディネーター

1・生活支援体制整備事業担当者研修・情報交換会」

が開催された。同県の情報交換会は、数年前から当財団が提案して開催しており、今回も一緒に企画を進めた。参加者約40名。厚労省や関東信越厚生局等からも参加があった。

はじめに県から行政説明があった。生活支援体制整備事業の説明や県内市町村の体制と取り組み状況、介護予防ポイントの導入状況として市町村の事例が紹介された。令和6年度の一部制度改正については、高齢者に限らない多世代の支援と連動・一体展開が可能となったこと、体制整備事業とはSCと協議体による地域の支え合いの推進である等の説明があった。

当財団は「生活支援コ

ー」ダイネーターと協議体に期待される機能・役割」というテーマで、全国の事例を通じて事前アンケートに答える講演内容とした。事前アンケートでは取り組みを3つ挙げてもらい、取り組みと課題、研修会で学びたいことなどを聞いた。事業については「特徴がつかみにくい」「達成感がない」「ゴールが分からない」などという意見があった。

財団からは、事業は地域づくりであること。関係者でビジョンを共有し、そこに向けて活用するツールであること。SCの役割のメインは支え合いⅡ地域づくりであり、新たな事業も出てきているが、地域づくりが一番の役割であることを

伝えた。

「地域づくりは地域の特性を生かすことであり、横展開は意外と難しい。課題は共通なことも多いが、手法はさまざま。事例やノウハウは、自分たちの地域に使えるところを使う」と伝え、体制づくり、ニーズと担い

手の掘り起こし、助け合い創出やネットワーク（多様な主体の連携）など全国の事例も紹介してポイントを示した。

事例報告の1つ目は、秦野市より「高齢者の移動支援と担い手養成の取り組み」。6つ立ち上がった買い物支援や介護予防教室への送迎

の仕組み、立ち上げの経緯、モデル事業、ドライバー養成研修会などについて具体的に報告された。関心の高いテーマで、質問も出た。2つ目は、川崎市「すずの会」の鈴木恵子氏より。「地域の特性に合ったボランティア活動の実践」「人生



神奈川県情報交換会での「すずの会」鈴木氏による事例報告

「体」として機能するために必要な取り組みなどは？、課題③ニーズの把握とその

解決としての創出やネットワークを効果的に進めるにはどんなアプローチ、人や組織との連携が必要か、課題④住民主体の移動支援の

社会参加推進事業

高齢社会NGO連携協議会 役員会・総会開催

〔6月16日・30日〕6月16

日に今年度第1回高齢社会NGO連携協議会（高連協）役員会を、30日に第1回総会をオンライン併用で当財団会議室で開催した。

第1号議案「議長並びに議事録署名人に関する件」

は、議長に黒水恒男理事、

仕組みを推進するための関係者の役割と推進）。

活発な情報交換が行われ、各グループからの発表を共有し、最後にオブザーバーと講師からコメントして終了した。（鶴山 芳子）

議事録署名人に岡本憲之理事が選出され、黒水議長により総会は進められた。

第2号議案「2025年度の事業報告及び決算報告の件」は、監査役の高橋陽子氏より監査承認の報告があった。

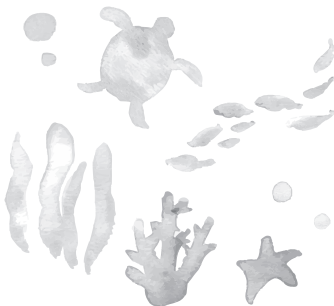
第3号議案「高連協新役

員体制の件」は、全正会員団体からの推薦として現役員体制の継続が全員一致で承認された。

その他連絡事項として大内尉義共同代表より、本年度政策提言事業「第68回日本老年医学会学術集会 高連協合同シンポジウム」の振り返りと来年6月に鹿児島で開催される日本老年学会に向けての内容が説明され、来年度事業計画に合わせた高連協の参加が呼びかけられた。清水肇子共同代表からも、積極的な参加に向けて理事会における事業計画検討の提案があった。

日本老年学会は、日本老年医学会・日本老年社会科学会・日本基礎老化学会・日本老年歯科医学会・日本

ケアマネジメント学会・日本老年看護学会・日本老年薬学会の7学会から構成されている。高連協は昨年6月、「エイジフレンドリーな地域共生社会に向けて」と題した日本老年学会との合同シンポジウムを開催した。来年度に向けても高連協の政策提言事業として、日本老年学会での合同シンポジウムの内容を詰めていく。（玉置 英明）



「高齢期のwell-beingをどう実現するか」 日本老年医学会学術集会で合同シンポジウム開催 - 高連協 -

当財団が事務局を務める高齢社会N G O連携協議会（高連協）が6月11日、神戸ポートピアホテル（兵庫県神戸市）で開催された「第68回日本老年医学会学術集会」において、日本老年医学会と合同シンポジウムを開催した。高連協の政策提言事業として行われた。

テーマは、「高齢期のwell-beingをどう実現するか～地域との連携とその可能性」。老年医学会の研究者に向けて、これまで取り組まれてきた「社会実装」「社会とのつながり」を柱に発表と議論が行われた。

はじめに、日本老年医学会名誉会員で高連協共同代表である大内尉義氏より高連協の成り立ちと活動が紹介された。続いて高連協共同代表で当財団理事長の清水肇子よりシンポジウムの趣旨を説明。人生100年時代の共生社会のキーワードは「多様性」「双方向」「尊厳」であるとし、高齢でもどのような心身の状態であっても、違いを認め合い、違いが活力になる社会が地域を活性化すると話した。

具体例は3名の登壇者から紹介された。

浦野友彦氏（国際医療福祉大学老年病学講座）は「高齢期のwell-beingを支える地域連携の実践―栃木県北部での取り組みから」と題し、栃木県那須塩原市で展開している大学付属施設である高齢者診察関連施設の事例から、「心身の相互関連性と社会的背景」としてフレイル予防には社会とのつながりが重要であること、「食の多

様性と地域活動による予防」として食品摂取多様性の維持と積極的な地域活動への参加がフレイル予防・改善、幸福感を力強く支えること等を研究データから導いた。

石田路子氏（高連協理事、N P O法人高齢社会をよくする女性の会副理事長）は「3 C…高齢期のwell-beingを実現するキーワード～集う（come together）・紡ぐ（compose）・創り出す（create）～」と題し、超高齢化社会に向けて、「共生社会の重要性和孤立しない孤独の覚悟」としてさまざまな取り組み事例から3 Cの重要性を説いた。

中村順子氏（認定N P O法人コミュニティ・サポートセンター神戸ファウンダー）は「地域活動でのつながりづくり―神戸の取り組みから」と題し、阪神・淡路大震災の教訓から「社会とのつながりなくして人間の復興はない」と述べ、そこからスタートした地域活動のさまざまなwell-beingの実践事例と成果を発表した。

締めくくりとして、地域（N P O等の活動団体）・医療・行政の連携強化の重要性が発信された。さまざまな立場の聴講者に共通認識を促す提言となった。（玉置 英明）



厚労省 地域づくり加速化事業 第1回運営委員会出席

【6月15日】令和8年度地域づくり加速化事業の第1回運営委員会が開催され、委員として出席した。

委員の紹介に続き、厚生労働省から今年度の事業の趣旨説明があった。その後、伴走支援を中心とする本事業全体を通じた意見や都道府県主導型事業評価・マニュアル作成について議論された。

今年度は次期介護保険制度改正前の計画策定の年となる。伴走支援が専門職任せになってしまわないか、計画にどう落とし込めるかが重要、との認識が多くの

委員から出た。

また、「地域によって人口減少のピークが違うことなどから、2040年より先の2060年を見ることが必要。いくつになっても活躍できる計画を立てたり、高齢化率が高い地域の取り組みをもっと評価することなども大切」などの意見が出ていた。

財団からは、「地域づくりは時間がかかり、そのプロセスでは成果よりも壁や課題のほうが多い。その対応ノウハウを整理して伝えていくことが、地域の実情が違う中でも活用できるし、

そうしたノウハウ等を生活支援共創プラットフォームの中で発信していくことも大切ではないか」と意見を述べた。

今年度は、21地域での伴走支援、ブロック研修など

東北大学公共政策大学院の皆さんが来訪 「居場所」について財団の考えをヒアリング

【6月23日】東北大学公共政策大学院では、必修科目に公共政策ワークショップを設け、例年およそ4つのプロジェクトを設定し、いずれも学生が主体的に運営しながら現地調査などを通じて政策課題に対して提言をまとめていく。今年度のプロジェクトの一つ、「居場所づくりから考えるソーシャル・インクルージョン」

が動き出す。新規事業として都道府県主導型の評価とマニュアル作成が進む。当委員会は2回目10月、3回目が来年3月に開催される予定。（鶴山 芳子）

を担当する度山徹教授が、

長く居場所の推進に関わる当財団の考えを聞きたいと、学生8人と一緒に来訪した。

前半は、共生社会推進リーダーの鶴山が、財団の事業紹介を織り交ぜながら「なぜ、今、居場所なのか」として、居場所の歴史や必要性、さまざまな居場所が広がっている状況を具体的な事例を交えて説明した。



当財団に来訪した東北大学公共政策大学院の皆さん
(後列左端は当財団の鶴山、右端は同・上田)

その人がその人らしく居られる場、対等な関係づくりを広げ、そこから助け合い

が生まれていく効果について学生たちは真剣に耳を傾けてくれた。

後半では、財団発行の『居場所ガイドブック』にも目を通してくれた上で学生たちが事前に話し合った中から出てきた質問に答えていった。項目は大きく3つ。①「居場所づくりにおける行政機関との連携について」では、居場所づくりを進めていく中で、SCや協議体はどのような役割を果たしているのか、地域差への課題等の質問も出された。②「本当に必要としている人へのアプローチや住民を巻き込む地域づくりについて」、③「中間支援団体としての他機関との連携状況について」。

すでに何か所か実際に居場所を訪問し、また前日には内閣府孤独・孤立対策推進室、こども家庭庁、厚生労働省を訪れ、制度面の学びを深めた学生の皆さん。住民の心を動かし助け合う地域を、仲間たちと共に働きかける中間支援の取り組みを知り、どう感じたであろうか。将来は公務員を目指す。

指したいという方が大半で、講義のない日も集まり熱い議論を交わしているとのこと。フレッシュでチームワークの良い皆さんが、7月の中間報告会に向けて、住民主体の地域づくりにおける居場所の意義を理解していただくひと時になってくれたならうれしく思う。

(鶴山 芳子、上田 恵子)

事務所 事だより

●今年度の「いきがい・助け合いオンラインフェスタ」のお申し込みがいよいよスタートする。職員一同、緊張が入り混じりつつも事前準備は着々と進んでいる。素晴らしい登壇者の皆様の発信をぜひお楽しみに！



感謝の
気持ちを込めて
思恩忌夏



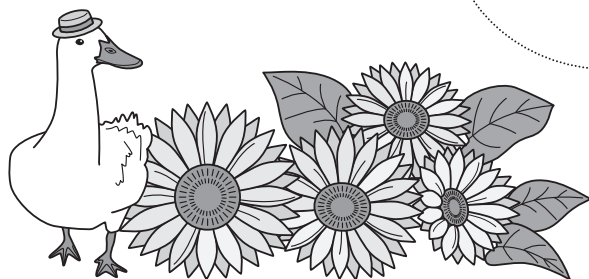
東京のお盆に近い7月22～24日の3日間、当財団の事業運営に多大なご貢献をいただきましたご遺贈者の皆様、故人の皆様にご感謝し、そのご遺志を再確認する「思恩忌夏」を執り行いました。

財団創設者で永世名誉パートナーの故堀田力さん、初代会長の故石川忠雄さんのお写真も飾り、花をお供えて、清水肇子理事長はじめ一同で、故人の皆様のご冥福をお祈りしました。

＜ご遺影を飾らせていただいた遺贈者の皆様＞

山路鈴子さん	沢村貞子さん	小村忠男さん	関美江さん	松岡廣子さん
石河刃雄さん・豊さん		大友恭子さん	齋藤規子さん	小島正治さん
平栗稔さん	小高根美耶子さん	原田愛子さん	藤原俊雄さん	遠藤利枝さん
伊藤和子さん	森川秀子さん	近持弘子さん	須永道子さん	綱川光子さん
橋本武義さん	近藤常子さん	天野郁子さん	國吉眞惟さん・蓮子さん	
坪川速子さん	小峰勝野さん	伊藤春子さん	澤谷静枝さん	安田夢栄子さん
設楽千恵子さん	和田和子さん	後藤富士雄さん	小林八重子さん	駒井雅子さん
高橋良三さん	佐藤芳子さん	小池すま子さん	阿久津弘子さん	
小林正樹さん	高田レツ子さん	城石眞紀子さん	竹内モハルさん	藤川宏さん
藤田美代子さん	匿名の方			

みんなの広場



地域の中での 交流の大切さを感じる

住寄 善志さん 72歳

岡山県

家の中で過ごすより、外に出て地域の方と楽しく交流することがとても身体にもよく、健康であると思う。私たちは、学区内の地域を毎週元気に歩く会をしています。発足してから4年半、毎週月曜日の9時半から約1時間です。

季節の変化、家の庭、道端の花々を見ながら、また、家などの変化を感じながら楽しく話し交流しながら歩くのです。

参加する方は10数人、計画する私は先頭を歩き、歩くついでにゴミを拾いながら行きます。

歩いた後の交流茶話会も時々行うと、「このウォーキングが楽しみな

のです。皆さんと歩くと元気になります」「季節の花を見ながら新しい発見もあります」との声があります。今、こうした地域の中での交流の大切さを感じます。これまで150回以上行ったウォーキングですが、これからも続けたいと思っています。すばらしいですね。地域でのふれあい・助け合いをぜひ無理なく続けてください。

投稿募集

『さあ、言おう』は皆様の声を社会につなげる問題提起型情報誌です。
ぜひ皆様の声をお寄せください。

〒105-0011 東京都港区芝公園
2-6-8 日本女子会館7階
公益財団法人さわか福社財団
『さあ、言おう』編集部宛
FAX: (03) 5470-7755
E-mail: pr@sawayakazaidan.or.jp

送付先



どなたでも
ご視聴
できます

一般財団法人長寿社会開発センター 研究セミナーと連携

さわやか福祉財団提供動画

「本人らしい生活をするために どうする？ 地域との連携」

当財団では、一般財団法人長寿社会開発センターのご協力を得て、同センターが実施しているオンライン「研究セミナー」お申し込み者向けに、地域との連携を考えるための動画を併せて提供させていただきます。

4回目となる今回の概要は、以下の通りです。「研究セミナー」は定期的に実施され、主に、居宅介護支援事業所、地域包括支援センター、在宅サービス事業所、基幹相談支援センター、行政関係者向けに業務の参考となるテーマが取り上げられていますが、興味・関心がある方ならどなたでもお申し込みが可能です。本誌読者の皆様も、この機会に気軽に学びを深めてみませんか？ ご参加をお待ちしています。

令和8年度 第2回長寿社会開発センター研究セミナー

テーマ：「セルフ・ネグレクトの方への支援のプロセス
～ごみ屋敷・支援拒否の事例から学ぶ～」(約90分予定)

講師：岸恵美子氏(東京医療保健大学 副学長 東が丘看護学部長/大学院看護学研究科 教授)

受講料：無料

実施方法：オンデマンド配信(YouTubeによる限定公開。期間中何度でも視聴可能)

配信期間：令和8年9月10日(木)10時～10月13日(火)17時まで

(研究セミナーお申し込み者限定 さわやか福祉財団 提供動画)

テーマ：「本人らしい生活をするために どうする？ 地域との連携Ⅳ」(約30分予定)

講師：鈴木恵子氏(認定NPO法人すずの会 理事長)

小川了子氏(みかど荘地域包括支援センター 看護師)

※研究セミナーと同様に、無料で配信期間中何度でも視聴可能です。

お申し込みは
こちら

一般財団法人長寿社会開発センター サイト内
(調査研究／研修会・シンポジウム)

<https://nenrin.or.jp/research/symposium.html>



お申し込み締切：9月4日(金)17時まで

配信の詳細は、上記お申し込み画面でご確認ください。

内容に関する問い合わせ先：公益財団法人さわやか福祉財団(上田)

電話：03-5470-7751 FAX：03-5470-7755 E-mail：seminar@sawayakazaidan.or.jp

申込に関する問い合わせ先：一般財団法人長寿社会開発センター 調査研究開発部(田中・古里)

電話：03-5470-6767 FAX：03-5470-6763 E-mail：kenkyuu2@nenrin.or.jp

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます（さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です）。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。ただし、窓口にて現金（硬貨）でお振り込みいただく場合は、ゆうちょ銀行所定の取扱料金がかかる場合がございます。

*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。
電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

表紙絵は はり絵・池田げんえい



「緑涼」

編集後記 ●「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2026」のお申し込み受付が14日から開始となります。ご参加をお待ちしております！（裏表紙、P24） ●「生き方・自分流」、〝自分型〟認知症でその人らしく…まさに目指したい生き方です（P4～）。 ●京都市の中山間部で、住民による移動支援活動が広がっています（P10～）。 ●協議体の活動に「スポーツさわやか広場」を組み合わせた楽しい催しが盛況でした。協議体の取り組みを多世代の地域住民に知ってもらう良い機会です。皆さんの地域でもいかがですか？（P16～）

助け合いを
広げよう!

新
ひとりごと

山本
美樹夫

世界の地政学リスクが高まり、

プラネタリー・バウンダリーが限界を超え、

AIが社会構造を変化させる中で、

ヒューマニティこそが大事な時代であり、

同じ思いに集い、

行動する自由を謳歌する社会を創りたいと考えます。



●NPO法人KIDS代表理事

NPO法人KIDSは、1992年の設立以来、「やってみれば、わかる」を理念とし、知的発達の遅れや社会的ハンディのある子ども達への社会教育機会を提供しています。

「さあ、よう」 8月号

通巻396号 2026年8月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい

編集担当 塩瀬潔子

取材協力 七七舎

イラスト 福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子

発行元 公益財団法人さわか福祉財団

〒105-0011

東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階

Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755

E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp

<https://www.sawayakazaidan.or.jp>

Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©



いきがい・助け合い

いきがい・助け合い オンラインフェスタ 2026

8月14日(金) お申し込み受付開始!

今年度も「いきがい・助け合いオンラインフェスタ」では、助け合いの地域づくりを進める学びの場として、全国のさまざまな好事例やノウハウ、仕掛け、工夫、ヒント等を発信いたします。

また今回より、地域での勉強会や協議体でお役立ていただけるよう、「勉強会特別お申し込み」を設定いたしました。

皆様のご参加をお待ちしております!

【主な対象】生活支援コーディネーター、協議体構成員、地方自治体、社会福祉協議会、地域包括支援センター等の地域づくり関係者、国・関係機関、NPO・民間団体、企業、学校等の関係者、助け合い・支え合う地域づくりに関係する方、その他関心を持つ一般住民など

開催期間：2026年10月13日(火)～10月22日(木)

開催方法：完全オンライン配信形式 (11月30日(月)までアーカイブ配信)

参加費：<通常お申し込み> 1人1000円

<勉強会特別お申し込み> 1グループ5000円 (人数制限なし)

※参加費と同額を当財団の「地域助け合い基金」に拠出して、地域活動を応援します。

※勉強会特別お申し込みの詳細は、お申し込みの際にホームページでご確認ください。

お申し込みウェブサイト <https://festa.sawayakazaidan.or.jp>

●プログラムは、本文24ページをご覧ください。

お問い合わせ

さわやか福祉財団オンラインフェスタ担当
電話 (03) 5470-7751

当財団ホームページからもお申し込みいただけます。

お申し込みはコチラからも ➡

